

メリュジーヌ伝承の比較

篠田 知和基

蛇と騎士

フランス西部ポアティエ地方のメリュジーヌ伝承は日本の豊玉姫説話と比較される（アルフリーランクネール）。

フランスの話は、ある騎士が蛇妖精と結婚するが、見るなの禁を犯して見ると蛇である。その後、妖精は子を残して去ると言う伝承である。

豊玉姫説話でも、ヒコホホデミが結婚した相手は出産に際して見るなの禁を課す。それに背いて見ると蛇になっている。（竜とも蛟とも鱧とも言う）。豊玉姫は子を残して去る。

豊玉姫については多くの論考が重ねられている。前半部の竜宮訪問譚については松本信広氏によって、セレベスの類話が指摘されている。（『日本神話の研究』）

後半部の見るなの禁、あるいは、蛇との交婚譚については朝鮮の作帝建の物語や、ビルマのクン・タイクム説話が始祖譚としても類似性を示している。（二品彰英『建國神話の諸問題』）

ほかにも近隣諸国に類似の説話がある。それらを通り越してメリュジーヌと豊玉姫を直接比較することは問題がなきにしてもあらずであろう。

それでも、さまざまな「類話」の中で、東と西のこのふたつがほかよりも濃厚な近接性を示しているともみられる。

「見るな」「蛇」「子捨て」「別離」という要素は同じである。メリュジーヌでは見えてはならないのは出産の場ではなく、水浴の場だが、一三九四年にこの話を物語にして書き著したジャン・ダラスのテクストでははじめにメリュジーヌの母妖精プレシーヌの結婚と別離の物語が描かれており、そこでは、人間と結婚した妖精は出産の場を見ないように言う。ヨーロッパでは出産にまつわる禁忌が物語の中で機能することは少ないが、このプレシーヌの物語とその子メリュジーヌの物語を重ね合わせれば、出産の場の禁忌になる豊玉姫の物語とフランスの物語はたしかにかなりな共通項を有している。このたぐいの物語で、出産をめぐる禁忌を語るものはこの二つ以外に今の所見あたらない。しかし、この二つは本当に同じ話なのだろうか。

日本の昔話研究では「メルシナ型」というタイプが規定されている。異類婚説話のうち異類女房で、婚姻に条件が付されており、その条件に違反して婚姻が解消されるものを言う(松前、関)。しかし「メリュジーヌ(メルシナ)」はアアルネ・トンブソンの国際話形分類には入っていない。この話形は国際的には「伝説」という扱いで、昔話からは除外される。

伝説、神話としては「メリュジーヌ」はインドの天女アプサラス族のウルヴァシの話と比較されることがある(ビュルトー他)。その場合はむしろ「天人女房」である。すくなくとも蛇は出てこない。フランスではジャン・ダラスの『リュジニヤン家のいとも高貴なる物語』が、現存する資料のうち最古のものである。その後、ドイツ語に翻訳され、民衆本として広く読まれる。ヨーロッパでは文芸説話である。

伝説なのか、昔話なのか、説話なのか。共通話形の比較としてもまずジャンルを確定する必要がある。それにメリュジーヌと豊玉姫を比較するには、その中間地帯の伝承も調べる必要がある。

朝鮮の作帝健の后もすでに述べたように竜になって竜宮へ行く。竜宮へ行って与えられた后であり、竜になって井戸に飛び込むところを見られて別れる。子孫がその後栄えるといった所は豊玉姫ときわめて近い伝承であろう¹。

ビルマの「クン・タイカム」も竜が牧童と一緒に子を生み、その子を湖の岸に桐の葉に包んでおいて行く。岸边に子をおいて行

く所はまさに豊玉姫である³。

ブルズイルスキはスキタイの始祖譚に現れる蛇妖精エキドナ⁴の話をメリュジーヌ譚とみなしている(『大地母神』一九五〇)。吉田敦彦氏は同じスキタイでももう少し古い伝承であるドニエプル河の女神と天神との婚姻譚を豊玉姫と比較する。(『アマテラスの原像』)川の女神の話ならガンジスの女神ガンガの婚姻譚も禁忌背反⁵によって破綻する物語である。

スラブ圏にもメリュジーヌ伝説があることは多くの研究で論じられている。

ピエール・ガレーはメリュジーヌの類話として、朝鮮の田螺女房や、日本の竜宮女房まで列挙する(『泉と木の妖精』一九九二)。

ほかにブレックノックの妖精(ワステイニアス)、ケルトの湖の妖精、アルプスの蛇妖精、エドリックのほか、ギンガモール、グラエラン、バルトノベウス、プルツエラ・ガイア、バソラのハッサン等をあげている。異類婚をすべてあげたという感がある。

ゲルマン神話学のクロード・ルクトウはメリュジーヌと白鳥の騎士の伝承を接続させる(『メリュジーヌと白鳥の騎士』一九八二)。

アルフ・ランクネールは中世説話に少なくとも十一例ほど先行話があると指摘(『中世の妖精』一九八四)、また、その後の展開として、ギンガモールのレ、ランヴァルのレ等をあげている。が、そこでは、蛇の姿が現れる例は二―三にとどまっており、大半はウルヴァシ型の妖精との結婚の話である。

異類女房が動物の姿を現して去って行く話なら白鳥、あざらし、柳女房なども類似の展開を示すが少しづつ相違する。

大林太良はこれらの話をナマズ女房と比較する。

ソルランはかささぎ妖精の伝承やバンシー、あるいは女性の月経起源譚と接続させている（『命の叫び、死の叫び』FFC248、一九九一）。

ここでロランス・アルフルランクネールのあげたメリュジーヌの姉妹を見ておこう。いずれも十二―三世紀の説話集にあがっている話である。蛇になって水浴していたところを覗かれて去っていったというメリュジーヌそのもの話と、変身のモチーフを欠いた水の妖精の話、あるいは、女に化けて男を誘惑しに来た悪魔の話など十―一例だ。

ウォルター・マップの「De Nugis Culialium」中の

- 1・出っ歯のヘンノ
- 2・森のエドリック
- 3・ワステイニヨックのワステイヌス
- 4・メリディアナ
- 5・死女の子

ジョフロア・ドセルの「Super Apocalypsim」中の

- 1・シシリアのメリュジーヌ
- 2・白鳥の騎士
- 3・ランゴンのメリュジーヌ

メリュジーヌ伝承の比較（篠田）

ジェルヴェ・ド・ティルビュリの「Otia Imperialia」中の

- 1・ルーセの城のレモン（メリュジーヌの直接の源泉）
- 2・エペルヴィエの城の奥方

ジラルダス・カンブレンシスの「De Principis Instructione」中の

妖精界へいった男の話

ほかにヴァンサン・ド・ボーヴェ、ウルリック・モリートルなどがこれらの話を採録している。

ただし、論者が詳しく論じているのはこのうちヘンノ、エドリック、ワステニアス、メリディアナ、シシリアの妖精、ランゴンの妖精、ルーセの城のレモンの七例である。

このほか、メリュジーヌ以後の妖精譚として、「ギンガモール」、「ランヴァル」、「グラエラン」、「デジレ」があげられ、その後、異境滞留にもなう異類婚として「モルガン型」説話があげられる。このうち女が竜になるのはヘンノ、シシリア、ルーセのレモンの三例だ。それ以外は妖精ないし、悪魔で、人態の存在である。ただし、禁忌を課して人間と交わり、子どもを産んだ後で、男の禁忌背反によって別れて去って行く。アルフルランクネールにとって「メリュジーヌ」譚とは「禁忌背反」によって「子捨て」をして去って行く妖精の話という概念があるのだろう。論者によって、メリュジーヌの概念はさまざまである。

それに、似ていると言うだけなら際限なくリストが広がるだろう。その一方では、異類婚の日本型の昔話と、各国の始祖伝説、それに

ヨーロッパの中世説話はそれぞれ違うカテゴリーに属する別個な伝承であるとする見方もある。また、動物種にのみ注目して、ここにも蛇の話がある、こちらにも、というように言い出すと、三輪山や「道成寺」伝承も出てくる。しかし、構造的には三輪山はともかく、「道成寺」は違う構造を持っている。女も馬場光子に言わせれば「走る女」であり、あるいは「追う女」である。メリュジーヌのほうはそれに対して「逃げ去る女」「別れる女」だ。それでも同じ「追う女」でもホームチワケの出会った肥長姫はかなりなまでにメリュジーヌの性格を持っている。

もしかすると、蛇としては肥長姫や道成寺の女のような展開をするものが、もとの形なのかもしれない。『華厳縁起』でも女は竜になって男の後を追う。物語はこれを男の船を故郷まで無事に送り届けるためとしているが、水に飛び込むと竜になるというのは道成寺と同じだし、竜になって海原を渡ってくるのは肥長姫と同じだ。それに対して、素性を見られると去って行く女は日本では狐女房、鶴女房などで、ウルヴァシの系統と思われる。また日本風の報恩譚ではなく、羽衣を取って無理矢理女房にするタイプの話ではまさに国際的な白鳥処女の話がある。彼女たちは羽衣を取り戻せばただちに飛び去って行く。「逃げ去る女」としては「白鳥処女」のほうが典型的とみなされる。「白鳥処女」と「蛇の執念」の話があって、そのふたつが交差してメリュジーヌができたという可能性もある。その場合は、メリュジーヌと豊玉姫を比較することの意味が問われて

くる。

確かに肥長姫・道成寺の系譜はあるだろう。また、白鳥処女の系譜も確かにある。しかし、メリュジーヌ・豊玉姫の系譜も検討は出来ないだろうか。

表面上の類似をたどる比較、動物種を入れ替えた比較、物語構造を組み替えた比較、背景となる水や蛇や大母の信仰をもとにした比較、覗き、水浴、契約婚等、主要なモチーフによる比較とさまざまな比較が可能である。

ヨーロッパの蛇の伝承なら、一・蛇妖精、二・ヴィーヴル 三・おそろしい接吻の三話型がある。そのうち、「蛇妖精」では、美しい女が押し掛け女房的にやってきて一緒になるが、夫の禁忌背反（この場合は言葉に関するタブーである）によって結婚が解消される。ただし妖精は、残した子どものために姿を隠してやってくる。

ヴィーヴルは額に宝石をつけた蛇で、湖にやってきて水浴をする。水浴中、額の宝石を岸においておく。金の鎖を取って水浴する白鳥の子どもたちが思い出される。白鳥伝承と蛇伝承は交差する。

「恐ろしい接吻」では森の中で待っている蛇と接吻をすると呪いが解けて王女が現れる。「美女と野獣」でも「鹿になった王女」でも見られるモチーフだ。これによって動物が人間になる。

ヨーロッパでは「粉屋とがちょう」、「巨人カラバルダン」、「二文のヤニック」、「鹿になった王女」、など、四〇〇番一四〇一番の昔話があるので、その中にはメルシナ型と言えそうなものがある。

「鴨女房」(エスキモー)「マリオ・メナク」(インドネシア)減らない米)「ポロパダン」「ナラウと数珠かけ鳩」、「マニン・ポロク」、「ママヌア(髪の毛)」などはヨーロッパと日本の中間地帯の伝承である。

「白鳥女房グルベール」(リトアニア)など、類話は北欧やバルト海地方にもある。

いずれも禁忌背反によって婚姻が解消される話だ。動物種は多様で蛇には限らない。

この中の蛇妖精は「押し掛け女房」だが、日本の蛇婿が畑仕事や水乞いの返報として嫁をもらいに来到ることに比較できるかもしれない。主人公が干し草干しをしていると、美しい娘が来て牧場の向こうで仕事を手伝ってくれる。それが三日つづいて話をするようになり、やがて一緒になる。畑仕事を契約によって依頼したわけではないが、妖精としては、結婚を前提として手伝いに来たのだ。メリュジーヌの場合も援助の申し出を妖精のほうです。マハ等でも押し掛け女房である。いずれも仕事を手伝い、そうとは言わないが、事実はその報酬として一緒になる。

結局、表面的には動物種が違ったり、禁忌の種類が違う、あるいは、出会いの条件、状況が違ってても、その相違に本質的な違いが無いとすれば、メリュジーヌの類話はかなりおおくなる。それでも、「メリュジーヌ」という名前を冠した伝承はよその国、特に日本には言うまでもないが存在しない。その代わりに文学では、一三九四

メリュジーヌ伝承の比較(篠田)

年のジャン・ダラスの『メリュジーヌ物語またはいと高貴なるリュニャン家の物語』以後、クードレットの韻文編、リンゴルチンゲンのドイツ語編、さらにその民衆本版と出て、ヨーロッパでは大いに好まれる物語となる。

その後、近現代ではメリュジーヌ・モチーフをめぐって、「メリュジーヌ作品群」がある。ゲート⁹、ブルトン¹⁰、フランツ・エレンスなど「メリュジーヌ」をタイトルにした、あるいは、そのモチーフを展開した作品は十指をくぐらない。

神話としては、竜女が建国英雄の子を宿し、その子を地上に送り届ける話である。女はすべて竜である。竜の始祖譚である。

昔話としては、異類が女になってやってくるが、正体を見られて去って行く話だ。女は狐、鶴、蛤などいろいろである。破綻する異類婚譚だ。

文学では神秘的な逃げ去る女として描かれる。ゲートではこびとだが、エレンスではメリュジーヌは異類でも竜でもない。逃げ去る女の物語だ。

蛇女の物語としては「レイミア」「道成寺」「蛇性の姪」があるが、「メリュジーヌ」ではない。ジャン・ダラスの「リュニャン家物語」も必ずしも「メリュジーヌ」ではない。実は「メリュジーヌ」と題する作品のほとんどがメリュジーヌ型ではない。

女の秘密が暴露されて夫婦の縁が切れるという話なら、蛤女房などのほうがメリュジーヌには近そうである。しかし、なれそめの事

情がちがう。

これらは果たして同じ話なのだろうか。それぞれ別な話ではないだろうか。

文学は取りあえずおいておいて神話伝承の類話の共通要素と相違を見ていこう。

出 会 い

まず、出会いと結婚に至る事情を見る。同種の物語では略奪、駆け落ち(スセリヒメ)、強制(白鳥)、誘惑、契約、取引、いろいろある。

豊玉姫は竜宮までいった男が井戸の上の木の中に潜んでいて王女に見破られる。メリュジーヌでは森をさまよう主人公の前に妖精が忽然と現れる。しかし、そこも泉のほとりで、泉||井戸、竜宮||森と考えると、出会いの性格も略奪や強制ではなく、偶然か、双方の合意かだし、どちらもあえて言えば、妖精の側からの働きかけであると言うように共通性を示している。

ヨーロッパの妖精婚では出会いの条件としては王女が呪いにかけてられて動物の姿になって、解放者を待っている。そこへ、騎士が登場するというのがおおい。「鹿になった王女」などがそれだ。騎士が鹿、あるいは蛇(蛙、猫などもある)と接吻するのはおおくは女性の頼みをどんなことがあっても聞かなくてはならないと言う騎士道の約束に従ったので、「接吻すれば金貨を上げる」と言う

「二文のヤニック」の場合はむしろ珍しい。これと、日本の報恩譚は話が違うようにも見える。中世説話では「恐ろしい接吻」のタイプの物語だ。騎士の勇敢さと義侠心の証である。それを宗教的に言えばおそらく、神への忠誠であろう。ヤマトトビモモソヒメが蛇の姿の神を見て叫び声をあげ、神が憤って去って行く話にこれに近いだろう。

「白猫」¹⁾では森の中へ出かけていった青年が白猫の城へ着き欲待され、宝物が出る箱のたぐいをもたらす。「舌切り雀」「浦島太郎」などと同じ竜宮欲待譚である。豊玉姫でもヒコホホデミは竜宮まで出かけて行く。メリュジーヌはそこまで行かないようにも見えるが、森の中の泉のほとりは竜宮の玄関先と考えられる。

中世説話では泉のほとりで水浴中の妖精の衣を奪って妖精と結ばれることも多い。「ギンガモール」、「グラエラン」、「ランヴァル」。アルフランクネールはこれらをメリュジーヌ譚としているが、もちろん、どちらかといえば羽衣、白鳥処女譚である。蛇型の妖精の場合、無理矢理言うことを聞かせるということは少ない。妖精のほうで接近してくるか、欲待してくれる。中には、騎士を誘惑しようと言う下心で接近してくる妖精もいる(メリディアン)。これは、「食わず女房」である。森の中の城は、日本では「鶯の里」だろう。天からおりてくる白鳥妖精を待ち伏せして捕まえるタイプの物語と、竜宮へ出かけて行って欲待を受ける話はやはり違う。アルフランクネールは妖精がちちらにやってくる話をメリュジーヌ型、こ

ちからから竜宮へ出かけて行くタイプをモルガン型と分けたが、豊玉姫はモルガン型になる。が、妖精を無理矢理手に入れるのではなく、妖精のほうから恩恵を授けに来る、歓待してくれる、偶然の出会いながら、保護を約束する、そのいずれも妖精授福譚でその意味ではメリュジーヌも同じである。あえて、メリュジーヌ型とモルガン型を分ける必要はなさそうだ。

本来は神が地上に福を授けに下ってきた。それを歓待すれば福が授かった。正しく対応しなければ福が去るなり、災いが降り懸かるなりした。三輪山説話や大和著墓説話はそのタイプである。神話型といってもいい。その後、地上が人間のものになって神がやってこなくなればこちらから行く必要が生じた。それでも妖怪は人を取って食おうとして、あるいは、西洋の悪魔のように魂を地獄にさらっていこうとして向こうから相変わらずやってきた。その場合、向こうからやってきた「食わず女房」型の悪意を秘めた女と竜宮で待っていた童女とはまるでちがうようにも思われるが、メリュジーヌを「悪魔の女」とみなした伝承で、正体を見破られるともはやこれまで、と屋根をけやぶって怪物の姿で逃げ出したということになると、解釈によって、どちらにもなることになる。キリスト教の見地から、異類はすべて悪魔だとみなせば、メリュジーヌも悪魔であり、彼女がやってきたのは、騎士を誘惑して地獄へさらうためだった。ヘンノの物語では蛇になって去って行く妖精は騎士がやってくるのを待ち伏せして、嘘と策略で騎士の心を籠絡したことになる。¹²

メリュジーヌ伝承の比較(篠田)

その種の両義性は「食わず女房」でもあり、津軽の「烏の姉御」は明らかに「食わず女房」だが、鳥は産土の森の神で主人公の性根を入れ替えてやろうとしてやってきたという。善意の存在である。「両義的であるといえば、「蛇婿」でも両義的で、神である場合もあれば、女にとりつく邪霊と考えられる場合もある。なお、「蛇婿」はたいいてい向こうからやってくる。

もう一つの出会いのパターンは「契約」で「蛇婿」でも「水乞い」型といわれるものでは、水をやる代わりに娘をもらう。猿婿では畑仕事を手伝って娘をもらう。ヨーロッパでも、「美女と野獣」で、このタイプの契約が出ることもある(「ラングドックの昔話」)。普通のタイプでも城のバラを摘んだ父親が怪物に捕まって、娘を差し出さなければ命が無いと脅される。が、同じ話形の「烏の王様」という話では父親の見えなくなった目を元通りにしてやるので、娘を差し出せという。脅迫と契約は紙一重である。違う話形だが「魚の王」¹³では、つり上げられた魚が助けてくれればなんでも願いが叶うようにしてあげようと言う。取引だが、これも契約の一つとみなされないことはない。日本では、鶴女房、魚女房など、本人がなにも言わずに苦しんでいるところを主人公が助けてやる。すると、その晩、戸をたたたくものがある。これを、「魚の王」は、加害者が被害者と取引に応じる例、鶴女房では加害者は第三者で被害者を主人公が無償の好意で助けてやる例だとして、区別することが出来るかどうか微妙である。「浦島」では、つり上げた亀が美女に変じて漁師

と交わり、さらに竜宮へ招待する。「鶴女房」でも「浦島」でも妖精はなにも言わずに黙って好意を示すものの、浦島は亀をつり上げた加害者であり、亀が漁師に好意を示す理由があるとは思えない。あえて言えば、神が人間に恩恵を施そうとしてやってくる。その場合、漁師も鶴の夫もいくら働いても生活の楽にならない独り者で、神がそれを哀れんで恵みをたれるのだと考えられる。

「魚の王」でも強欲な漁師が魚を釣り上げた話と言うように語られることもあるが、これも△魚の王▽ともあろうものが、おめおめと漁師の針に掛かるはずもないので、やはり、神が進んで針に掛かってやって、運を漁師に与えてやろうとしたのだとも考えられる。また、「鶴女房」の類話でも、狛師が自分で仕掛けた鳥畏を見にゆくと鳥がかかっていて、その鳥が、命を救ってくれと頼んだと言う場合もありうるのである。

その違いも西洋では条件が明示され、日本では曖昧にされているというように一概に言うこともできないのは、たとえば、蛇が蛙をもうとしているところを娘を嫁にやるから助けてやれといったところ、その夜、蛇が娘をとりに来たという話では、「契約」はきわめて明瞭で、曖昧なところはすこしもない。あるとすれば、「契約」にも関わらず、娘が観音の助力を願って、蛇の嫁になることを拒否することで、これでは何のための契約かわからないということになる。それは「猿婿」や、ほかのタイプの「蛇婿」でも同じで、娘は蛇や猿をやっかい払いしようと考える。もっとも、西洋でも「蛙の

王様」のグリムの話では池の蛙と約束をしながら、王女はやってきた蛙を壁にたたきつける。契約、取引、報恩、あるいは、神の授け、悪魔の誘惑、すべて同じ異類との出会いの語りのレヴェルでのヴァリエーションかもしれない。

要するに異界の存在と地上の人間が出あうときにそれなりのプロセスがあるということだ。普通の人間同士の出会いは違う。ある種の神をいつき祭る儀礼が必要なのだ。そしてその儀礼の在り方において、豊玉姫とメリュジーヌは相同性を示している。泉のほとりでの水の霊格への祭儀であり、水乞い祭式であろうにもかかわらず、祈願の種類が明示されず、男女の自然な出会いに見せかけられている。

禁忌

出会いには結婚の条件の提示が続く。メリュジーヌは「土曜に姿を見ないこと」という条件を課す。豊玉姫では結婚の条件は明示されない。昔話の「蛇女房」でも結婚の条件は明示されないが、「見ないでくれ」という希望は、別の状況で必ず出される。「鶯女房」でも奥の座敷を開けないでくれというのは見ないでくれと言うことだ。明示されなくとも同様の禁忌があるのは、蛙女房、蛤女房で、見ることによって婚姻は破綻する。「食わず女房」でも同じである。少し違うのは、大和箸墓伝説で、姿を見せてくれと頼まれた神はそれでは明日櫛箱を開けて見るように、ただし、決して叫び声をあげてはいけないと言う。翌朝、箱を開けた女はそこに小蛇を見つけて

思わず叫び声をあげる。とたんに神は天に昇ってしまう。ここでは、箱を開けても叫び声さえ出さなければよかったのだが、たいていは箱も開けてはいけなかった。「浦島」「天稚彦」とも開けてはならない箱を開けて幸せを失う。この箱は神域であるとともに、卵と同じ、次の世代の子の誕生の容器である。メリュジーヌの場合、それを彼女の部屋全体に拡大してよいのか、それとも彼女が浸かっていた桶型の浴槽と考えてよいのか、いくぶん留保がいるところである。¹⁴

それに、メリュジーヌの場合は単なる「見るな」の禁忌ではなく、それを「明かすな」という言語的な禁忌をとまなっている。¹⁵

西洋では一般に禁忌としては「特定の言葉」を発してはならないというものがある。あるいは、妻のすることに反論してはならない。「特定の道具で触れてはならない」あるいは、単に「たたいてはいけない」等がある。エドリックの場合は、森の妖精にその起源を思い出させるようなことを言ってはならなかった。ブレックノックの妖精は馬の道具でさわられることを嫌っていたが、おそらく彼女の本性が馬の筋であったためと思われる。¹⁶ 結局は素性を見られることと同じである。

禁忌を犯して去って行くときはたいいてい本来の姿、すなわち動物身になってゆく。その後、残されたほうは子孫が栄えたというものもあり、そのまま運に突き放されて零落して行くというものもあるが、¹⁷ 始祖伝承か、昔話かのちがいもあろう。

豊玉姫の場合「見るな」の禁忌が必要だったろうか。見なくとも

豊玉姫は去っていったらう。見られても彼女は妹の玉依姫を乳母として、あるいは、後の妻として遣わすのである。

ヒコホデミとしては彼女を失ってそれによって失うものはなかった。竜宮説話としても玉手箱のモチーフもない。これは純然たる異類始祖説話である。小泉家、緒方家、五十嵐家などと同じ、神としての蛇と人間との結びつきによって生まれた一族の歴史を物語る。

その点ではメリュジーヌでも同じである。リュジニャン家物語としては、見るなを禁を破って、メリュジーヌを失ったことは必ずしも不幸の始まりではない。始祖説話で禁忌違反を語る必然性はないのである。あえてあるとすれば、異類始祖と人祖のあいだに線を引くためではないだろうか。出産にかかわる禁忌はその点、より原初的と言えるだろうか。人間の歴史のはじまる前の世界、神の世界に興味を持って覗き見るのは、神の冒瀆である。

一方、蛇妖精の話としては、若者が蛇妖精と一緒にいるが、禁忌を破って（相手を蛇と呼ぶ、ほか）、婚姻が破綻する。妖精は後も子どもの養育のために密かに戻ってくる。

この話は、まず、蛇の目玉と比較すると、目玉のモチーフこそないものの、禁忌（見るな）、子育て（目玉）は共通している。出産の禁忌を持って語られたプレシーヌの物語りを前提として語られるメリュジーヌの物語りでは、子を生むことより、子を捨てること、或いは、子を育てることに重点が移っている。その辺はウガヤフキアエズの養育に玉依姫があたり豊玉姫の物語りにも、伝承の文化状

態への移行が見られる。

メリュジーヌはしたがって見るなの部屋と捨て子(子わかれ)と、蛇伝承を持っている。そのうち、見るなの部屋の典型は日本では鶯の里と鶴女房である。鶴なら機を織る。

別伝では蛤で、これも機を織る。食わず女房でクモの場合があるが、これも機織りだろう。竜宮女房でも水の底で機をおる。天人女房なら、羽衣で空を飛ぶ。

フランスでは「見るな」の物語りの典型は「青髭」である。「青髭」を構造的にとらえれば日本の猿神だが、あるいは熊でもあるかもしれない。異類婚である。それも毛だらけの獣(けもの)だ。ゲニユベなら、羊毛文化の象徴だと言う。日本では羊毛はないが象徴としては機能し得るだろう。髭の異相は「八束髭帯に垂れるまで」と問わず」というスサノオ、ホムチワケ、アジスキタカヒコネだ。いずれも言語障害を持った髭男で、蛇と関わりがある。これを青髭との関連で繊維象徴と見ることはできないだろうか。

いづれにしてもスサノオを日本の「青髭」とするところに着眼がある。オオクニヌシの説話ではスサオノは、髪を柱に結びつけられる。いずれも髪や髭が伸び放題の異相の神なのだ。それを刈り込むだけでも(繊維)文化である。あるいは、天の機屋に斑駒をほおりこんで機織り姫を死にいたらしめたのも彼である。これら、粗暴な自然神を取り押さえ、文化的にするのが、たとえば、アルル・スル・テックの村の熊祭りの村娘ロゼッタである。

しかし、それらの要素だけでは、豊玉姫とメリュジーヌを同じ伝承であるとするには弱い。

槍と矢

ヒコホデミは無くした釣り針を探しに竜宮へ行く。同じ話と目されるセレベスの話では槍を刺されたまま逃げていった猪を追って地下の世界へ行く。朝鮮の作帝建の話では弓の名人が竜王国へ呼ばれて怪物退治をする。ジャン・ガラスの「メリュジーヌ」では猪狩りの槍がずれて、人をあやめてしまう。これがいずれも妖精との出会いをもたらすことになる。「鶴女房」でも矢が刺さって苦しんでいる鳥を男が助けてやる。「白猫」でも空に向かって矢を射って、矢の落ちたところで妖精に出会う話がある。いずれも狩猟・漁労文化の獲物を捕る道具が異類婚の導きをする。天の斑駒の話では機織りのオサが機織り姫のホトに突き刺さる。

オサ、矢、槍、釣り針が女神、洗濯女、猪、主君、魚、百足に突き刺さる。後の四例は蛇の敵に刺さって、それが竜女の褒美になる。直接王女に刺さるか、その敵に刺さるかはさて問題ではない。竜退治で王女に襲いかかる竜を英雄の矢が打ち倒したと考えればよい。刺されるものの方は、第一例では機織りのオサである。釣り針の場合針と糸を思わせる。蛇説話では「おだまき型」が針と糸を登場させる。竜族は針に弱いのである。金属に弱いとも言えるし、繊維文化に弱いのだとも言える。いづれにしても何らかの失策行為と針な

いし矢によって竜宮と地上が結ばれる。針をたどって行く娘は蛇の洞穴にたどり着く。釣り針を探して竜宮に行く。手元の狂った槍が妖精の待っている泉に騎士を引き寄せた。

彼が関係する蛇は男性としては丹塗矢になる。これが流れてきて女のホトをつく。その意味ではアマテラスのホトをついた機織りのオサと（そして ヤマトトトビモモソヒメの箸と）連なる。機織りの際に右左に飛び交うオサを蛇とみなすことはないだろうか。

「白鳥の関」という話では白鳥の精が狩人の殺生をやめさせようとして女になってくるが、男はかえって白鳥を射止めようとする。白鳥に代表される妖精を狩人が弓矢や槍や釣り針でしとめようとする。妖精はそれに対して、より文化的な価値を男に与えようとする。たいていが繊維技術である。羽衣にしる、天の綾錦にしる、あるいは、白猫のくれる胡桃の実の中に入った軽やかなうすぎぬにしる、それはきわめて高度な繊維文化を表している。

そもそも、竜宮の乙姫は機を織るのである。昔は神に仕える巫女が清浄な川の畔に機屋をたてて、神の衣を織ったという。それが、いつか、水底の竜神に見込まれたように機織り姫は水底に引き入れられて、水の底で機を織るようになる。「黄金の斧」は木こりが水の中に落とした斧を探しに水底に潜って、竜女にあう話だが、竜宮では竜女の機のわきに斧が立てかけてある。木こりだから斧だが、金太郎にとっては、斧も武器である。これはやはり、山の男の武器と水の女の機の葛藤である。

メリュジーヌ伝承の比較(篠田)

水辺の機織り姫の所には丹塗り矢も流れてくる。機織り姫が織りあがった布を水にさらしていると、川上から流れてきた矢がホトにつき刺さる。(台湾のバアラム伝説にも同じ赤い矢が登場する)²⁰。もちろん、天の機屋の斑駒の場の機織り姫のホトに刺さったオサと同じである。あるいは、射日伝説で太陽を射落とす矢とも通じ合う。狩人や、自然神の性的暴力が機織り姫を襲う。それが確実に目標に到達すると、それまでの攻撃性、自然性をそれは失って文化的生産的になる。機を織る。

投げ槍にしても、矢にしても、それは、自然の森の中を、あるいは川の水の中を鮮やかな赤い色とともに流れて自然を文化に定着しようとする。縦糸の間を飛び交うオサの動きとそれは通じ合う。メリュジーヌの話では槍のテーマが優先的で、そのあとの妖精の仕事も「開墾」「建設」そして、「子育て」であり、機おりは表面には出ない。豊玉姫でも機おりのモチーフはまだでてこない。いずれも狩猟文化から、定着文化に移行する時期の神話とみなされる。竜宮や、妖精の国はより文化の進んだ海彼の先進国であろう。文化がより進むと、同じ伝承に機織りの要素が明瞭になってくる。感情神話を表す丹塗り矢もより後代の付加要素だろうか。

善意／悪意

もう一つ別の基準を考えてみるにはハイチの異類婚を調べたコムエール・シルヴァンの「ハイチの伝承」一九三七が参考になる。あ

まり引用されないが、蛇型異類婚説話の重要な研究で、蛇婿がおおいが、彼女はそれを「悪意をもったもの」「善意を持ったもの」「それ以外」にわけている。

それに準じて分けると、産土の森の鳥がなまけものの根性をなおしてやろうとして、「食わず女房」としてやってきたという東北の話などは「善意」の部類だろう。鶴女房、蛤女房も報恩譚だがやはり、「善意」に属する。「天人女房」の場合は羽衣を取られてやむなく滞在したので、「善意」も「悪意」もない。狐女房の場合も同じだ。が、一般の「食わず女房」は男を食おうとしてやってきた山姥あるいは蜘蛛の怪で、これは「悪意」の部だ。

これに男のほうの「善意」「悪意」を考慮すると、狐の場合は両性の合意のもとに婚姻が成立しているが、天人では無理に従わせているので、「悪意」があるといってもいい。

鶯女房だと、初めは両性の合意というより、男が女によって入り婿を許される、あるいは、下男として採用されるという関係だが、最後は禁を破って、男のほうの方が悪くなる。

これを表にすると次のようになる。

	女の悪意	善意	受動	男の悪意	善意	受動	背反
魚	0	0	0	0	0	0	0
蛤	0	0	0	0	0	0	0
蛙	0	0	0	0	0	0	0
蛇	0	0	0	0	0	0	0

日本では男が魚や鶴を助けてやり、その恩返しに異類が女房になってくることが多い。これはヨーロッパではあまり見られない。猫でも長年飼われた札に奇跡を演じてみせる²¹。悪意がすくないのである。しかし、「猿神」ではあきらかに悪意がある²²。いや、それともそれは、善悪を越えた神の意志であろうか。

蛇婿、猿婿では先に見たように娘を嫁にやる契約で代わりに仕事をしてもらう。この「契約」の思想は契約をもとにしたユダヤキリスト教世界では一般的であっても良さそうだが実際はかなり隠蔽されている。それでも「蛇妖精」やマハはその構造を隠している。メリュジーヌでも彼女の失策を地上流謫の原因とするかそれとも何らかの契約関係がレモンダンとのあいだにあったかだ。

蛇婿は水を入れてくれれば娘をやるという取引である。娘を手に入れた蛇はその条件をのむ。メリュジーヌは果たして、男がほし

くて、レモンダンのほうへやってきたのだろうか。マハにしても魚女房でも押し掛けてきて留守中に掃除洗濯炊事をしているのは下心があるのだろうか。

蛇婿の「おだまき型」は、蛇が地上に神の種を残そうとして女のもとに通う。種の保存の本能というより、信仰の流布を目的とした布教活動ではないだろうか。メリュジーヌも彼女や蛇神を奉ずる民族がキリスト教に対抗して一族の伝統を守ろうとしているのだと解釈することはできないだろうか。

メリュジーヌのばあいは女―善意、男―背反という構図だが、そのもとをたどるとジャン・ダラスではメリュジーヌが罪を犯して、地上に遣わされる一種の流譚である。罪の結果呪いをうけて、人間の男と結ばなければならなくなる。かぐや姫だ。天人のばあい、その種の動機付けが少なくない。

後の『ガバリス伯』などに描かれた妖精譚では、妖精は人間と結ばれて人間になることを願っている。しかし、これはどう見ても人間中心、キリスト教社会中心の考えで、たとえば、イスラム教徒がキリスト教に改宗してキリスト教社会に受け入れられることを願うという種類の話である。

信仰が背後にあると考えるなら、水の神メリュジーヌをレモンダンは特別な曜日に見ないと言う約束でいつきまつる話だ。「竜神小童」になますを供えて金を出してもらおうような話で、神を迎えて祭儀を大切に執り行っていれば、福がもたらされる。授福妖精として

のメリュジーヌの性格はあきらかである。その妖精を迎えることが出来たのは主殺し、釣り針喪失などの失策をした落伍者である。あるいは、花を捧げつづけたうだつの上がらない花売りだ。

エドリックその他を表にすると次のようになる。

	女の悪意―善意―受動		男の善意―悪意―受動		背反
ヘンノ(蛇女)	0				0
エドリック		0		0	0
ワスティヌス			0	0	0
メリディアンヌ	0			0	0
シシリアの水妖		0	0		0
ランゴンの蛇女	0		0		0
レモン				0	0

ここでは、男が力づくで女をものにしていくことが多い。いずれにしても日本より男女とも受動性が少ないのは当然かもしれない。だまって待っている「待つ女」などいないというわけだ。もっとも、「ヴィーヴル」は「待つ女」である。

レモンの場合メリュジーヌと同じで、妖精が男を救ってやろうとやってくる。しかし、メリュジーヌではそのままに妖精が罪を犯して、人間界におとされるといいう経緯がある。すくなくとも、授福妖精としての性格が後退している。場合によると、悪意を持ってやってくることにさえなっている。神としての性格が後退し、男に手込めにされる女か、男を誘惑してたらし込もうと言う女か、物語りは

はるかに下世話になる。地獄落ちの魂を手に入れることを目的にしているといえ、日本では「食わず女房」だ。

このいくつかのケースをまとめると次のようになる。

一・妖怪が人間をさらおうとして人間に化けてやってきて婚姻を取り結ぶ。(悪意)

二・神が人間に福を授けようとして人間の姿でやってきて婚姻を取り結ぶ。(善意)

三・動物が契約によって仕事をして、報酬として嫁取りをする。

(契約)

四・動物が人間に助けられた報恩のためにやってきて婚姻を取り

結ぶ。(報恩)

メリュジーヌは二であり、浦島は四だ。道成寺は一で、豊玉姫は二だろう。

しかしヨーロッパの中世説話の例をみると、善意のメリュジーヌと悪意のメリディアンヌとは、解釈の違いでしかないとも思われる。キリスト教を中心にして考えるか、ほかの秩序を中心に考えるかで、価値が変わってくる。しかし、キリスト教的善悪感も文化要素である。原初の豊玉姫やメリュジーヌは人間の善悪を越えている。また、報恩と契約はおなじものの変形であるとも考えられる。ヨーロッパの「魚の王」だと、つり上げられた魚の王が放してくれば何でも願いが叶うようにしてあげようと言う。これも契約である。日本の魚女房だとなにも言わずに死にかかっていた魚を海に放してやると

後で恩返しに来る。が、これは暗黙の契約があったと考えられる。ただ、猫の恩返しのように日本では報恩のモチーフが好まれている。それでも狐のばあいは純粋な出会いとして描かれ、食わず女房では悪意を持ってやってくるが、鳥の姉御だと、見込みのある若者に恩を施してやろうとしてやってくる。

日本の例をまとめると次のようになる。

蛇婿 契約 水乞い―嫁とり 蛇殺し

猿婿 契約 畑仕事―嫁取り 猿殺し

鶴女房 報恩 傷手当―婚姻 別離

これは、朝鮮の始祖譚と同じである。(作帝建 契約 敵退治―嫁取り 別離)。日本で違った展開を示すのは「猫女房」の場合だが、(猫女房 報恩 養育―婚姻)、猫はすでに相当文化的な存在である。ネズミ退治の役としては、猫は原初的な社会の蛇を引き継いでいる。

異類婚が純粋な出会いでありうるか、それとも、契約が必ず隠されているのか、神が子孫を地上に残すためであれ、自分の信仰を広めるためであれ、地上にやってくるのと、悪魔が餌食を求めてやってくるのは下心がある点は同じである。天女が捕まって結婚に同意すると魚の王が捕まって、取引を申し出るのも同じである。英雄が竜宮に招かれてむかで退治をして、かわりに竜女を褒美にもらうのと、無くした釣り針を探しに竜宮へ行って、その竜女と一緒に

なるのは同じだろうか、それとも違うのだろうか。

「豊玉姫」は動物が蛇でなくともいいが、神話としては一・始祖譚であり、二・出会いは竜宮で、つまりモルガン型であり、三・女は地上には子を生みに来ただけで、子を生めば見るな禁の違反がなくともいずれば帰って行くはずだった。四・素性は蛇というのは地下の性格を持っていることをあきらかにしている。

メリュジーヌは一・始祖譚、二・出会いは地上（泉のほとり）、三・妖精は富を授ける授福者、かつ子育て妖精、禁忌背反が無ければずっと地上にとどまるはずだった。四・素性は蛇、となって二と三で豊玉姫と相違するようにも見える。しかし、メリュジーヌの少しあとの文学的な類話である「シビル女王の楽園」を重ねてみると、二と三はむしろ、豊玉姫に近いことがわかる。

シビル女王は一・始祖にはならず、二・出会いは竜宮（山の中の洞穴）、三・地上にはおりてこない、四・素性は蛇、である。妖精は本来山の中や海底の竜宮に住んでいる。メリュジーヌも実際、「アヴァロンの島」に住んでいたのが、森の泉まであたかもレモンタンを出迎えるようにやってきた。必ずしも、受動的に待っている男のところへ押し掛けてきたわけではない。

またハイチの伝承を見ると蛇という存在が人間を飲み込むものとしてとらえられていることが分かる。ハイチの蛇が人間に化けてやってくるのはすべて、相手を取って食うためである。日本では、**「鬼」か「山姥」**である。

メリュジーヌ伝承の比較(篠田)

メリュジーヌのばあい、取って食うという意図があったかどうかは疑問だが、無かったとは断定できない。大母の性格は顕著で従って、黒聖母等とも性格を交代しうる。すると、カリー女神とか、鬼子母神が思い浮かぶ。エドリックは森の大きな家で妖精が踊っているのを見かけてそのうちの一人をさらってくる。女は一方的な被害者のようだが、妖精が去った後、エドリックの上に不幸が降り懸かるといふのだから、妖精が害をなしたとも考えられなくはない。

水の妖精の場合はただ去って行くだけだが、蛇の場合はランゴンの妖精でも皆悪魔性がかなり顕著である。

結局、猿婿・猿神の対があるように、蛇婿、蛇神の対があり、鳥や蜘蛛でもそれぞれ、悪意の場合と善意の場合があるといえよう。その場合、「神」が常に善意とはかぎらない。

機能

これらの伝承を機能別に考えてみる。蛇妖精の出会いは蛇による農耕の手助けである。これは、日本の昔話の水乞いモチーフと接続すると考えてよいだろう。水妖精としてはメリュジーヌも同じだが、リュジニャン家物語では農耕モチーフは脱落する。それは、騎士伝承として農耕モチーフを隠蔽したとも考えられなくはない。

農耕というなら、鶴でも狐でも蛙でもほぼ同じであろう。報恩モチーフは蛇でも往々にしてでてくるが、それより、水の神、田の神が自らやってきて恵みをたれると考えた方がいいだろうか。

メリュジーヌに流滴モチーフを入れたのは文学的作意であろう。水の神が人間と結ばれて福をもたらすが、禁忌を破って神が去る。しかし、その子孫は栄える。それが、蛇の場合と狐の場合で色彩ごとにし、鳥の場合は子孫がない。これは白鳥でも同じで、このあたりは動物種の入れ替えが自由とは言えない。

というのは、鶴でも農耕モチーフととれないこともないが、それよりもやはり第一には機織りである。機を織らない西洋の白鳥でも羽衣を着ている。軽やかな透き通った着物で、それを着れば空に舞い上がるような不思議な着物である。素朴な農民は目を見張って見とれている。山の中の水の女神でもたとえば、山姥は川のほとりで機を織り、布を川にさらす。

見るなの禁も代表的なものは「鶴女房」であり、西洋なら「青髭」である。青髭は髭の異相であり、毛だらけの熊男にも通ずる。熊男は復活祭で捕まって毛を剃られる。羊毛紡績の象徴である。青髭が日本の鶴女房のように部屋に隠れて機を織っていたと言うのは滑稽だが、機能の連関をたどると、繊維文化が出てくる。

但し、メリュジーヌ自身には機織り妖精の面影はない。フランスでは、「アボンド奥方」という妖精が機織り妖精である。(「アボンドまたはアブンディアは、大地から芽生えるものすべての紡ぎ女であり機織りである。」アンリ・デュルヴィル『妖精』一九五〇、p.110)。紡績妖精の話は「眠れる森の美女」にも出てくる。ここでは、糸を紡いではいけない。眠り姫が唯一、機を織ることができる

のかも知れない。それらに対して、メリュジーヌをマルタン・シヴァは植物霊であるとする(『メリュジーヌ』一九六九)。メリュジーヌが自然を表した妖精であることは確かだろう。その点は大海原を表す豊玉姫と通じている。そして、その後の展開で開墾、農耕、紡績などが彼女の機能として付加されてくる。豊玉姫も水を支配する汐みつ玉、汐引き玉を与え、農耕の基礎を作る。海幸、山幸が狩猟・漁労の時代から農耕文化に移行するところを神話は描いている。

ルクトゥが、メリュジーヌのヴァリエーションとして「白鳥の騎士」をあげているのは、白鳥始祖の中世説話「ドロバトス」(一一八四ころ)との関係があるからだ。或いは、メリュジーヌでも十人の子供を生んだところに注目するからだろう。まず、ケルト伝説などで、白鳥妖精が、子を生むが、それを白鳥に変えられる。そもそも、白鳥の騎士でも白鳥の子が水浴びをするときは白鳥になり、金の鎖を首につけると人間になる。それを継母が悪意から鎖を奪うと白鳥のままになる。それが、白鳥の騎士の舟を引く白鳥である。

白鳥との関連はメリュジーヌが空を飛ぶことにも求められる。最後に正体を現して、翼の生えた竜になって飛んで行くのは彼女を悪魔とみなす根拠になるが、それ以前でも、一族のために城をたてるために夜な夜な空を飛んで、遠くから大石を運んでくる。空を飛ぶ妖精である。フランスやアイルランド土着のかささぎ妖精とも関連させられる(ソルラン)。災いを告げ、警告する妖精である。「メリュジーヌの叫び」と言えば、ことわざにもなっている。

そしてもう一つは、ル・ゴフとル・ロア・ラデュリの有名な論文に依れば「開墾・建設」妖精である。「一夜城」の様な伝承が各地にある。これは豊玉姫にはない要素だ。だが、「開墾・建設」を「国作り」と解すれば、始祖の仕事である。始祖であれば、たんに子を生むだけではなく、国も作らなければならぬ。もっとも、母神が始祖を生んで、国を作るべき土地に送り届け（或いは流して）、そのあとは、子が一人で国を作るものかも知れない。この大母の子捨ては、新たな国土への幼神の派遣であるが、ネガチヴに見れば子殺しである。

メリュジーヌも豊玉姫も子捨て、あるいは子殺しをする。豊玉姫は子どもを木の葉にくるんで岸辺においていったビルマの竜女の同類である。鶉の羽根とか、真床おふすまというものは、竜の木の葉の言い替えであろう。その流れは生まれた子どもを川に流す捨て子である。あるいは、親子ともども捨てられる。たとえば、「金色姫」である。うつぼ舟に入れられて川に流された娘は桑の木でできた舟の中で蚕のように眠っていた。その体からは蚕が生まれた。養蚕起源説話である。

犬の子

流されるのが犬である場合はどうだろうか。子を産んで犬にすり替えられるのも同じで、子どもはその間、水に流されている。犬と交わった女もうつぼ舟で流される。それをイコール「金色姫」といっ

メリュジーヌ伝承の比較(篠田)

てもいいが、そのあいだに「今昔」にある鼻から糸をだす犬の話をおいてもいい。狩猟文化に関わっているはずの犬がどうして、織維文化を表すのかこれは考えてみなければならぬ。花咲爺では土を掘って金や銀を出すのだから、狩猟文化に接続した金工文化である。それがいつから、農耕、織維文化に移行するのか、中国ではたしかに「狗耕田」がある。牽牛の話も犬とはまるで無縁ではない。牛飼は犬をつれている。

パンコ神話では、犬はパンに入れられて蚕のように育てられる。蚕、ひさご、うつぼ舟の伝承は一連の織維伝承には違いない。犬がしかし、織維、機織りでどんな働きをするのだろうか。猫は蚕を食うネズミを退治する。従って、養蚕地帯では猫を飼って、大切に（大木卓『猫のフォークロア』）。犬ではネズミを食いそうもない。

狐女房は犬にはえたてられる。弘法大師が麦を盗んでくるときに犬を使う。農耕については犬の働きは顕著である。猿神、竜退治でも犬が活躍する。白鳥に乗ってやってきた金屋子神を死にいたらしめるのも犬である。同じような白鳥象徴を持った機織り姫を犬が追いつてるのだろうか。羽衣型の天人女房では、逃げた女房を追って天に昇って行く主人公を犬が助ける。余呉の海伝承では獵師が犬に羽衣を取って来させる。

犬が退治する蛇も金工文化をあらわすとともに織維を形象するものでもありえたらう。八つの頭の竜は八本に別れた糸に横糸を通して行くプロセスを思わせる。攻撃性だけで選ばれた形ではない。八

列の頭はむしろ攻撃には邪魔である。その動きは線よりむしろ面を表している。糸を組み合わせて織りなす布である。

それに西洋では犬は主として羊の番をする。羊は毛のために飼う要素が強い。犬はすなわち羊毛産業の守り神である。それは、養蚕にたいして猫がいることと同じだろう。

また犬は桃太郎と同じように水界を下ってくる植物霊である。「白猫」の話において出てくる子犬も象徴的である。

中国では「白猿伝」に犬が出てくる。怪物は犬を引き裂いて酒を飲み、酔うと、縛らせてその縄を断ち切ってみせるのを自慢にしている。ある時、犬をつれた英雄が女たちを救いにやってきて、特殊な絹糸を交えた縄で縛らせる。猿はどんなにいきんでもこの縄は切れない。そのまま、英雄の刃を受けて息絶える。犬と繊維が出てくることに注目したい。「青髭」でも子犬が出てきて、女の実家に急を告げるのである。「見るな」の物語は文化的に変容してきたとき日本でもヨーロッパでも繊維文化に関わってくる。

「見られた」女は竜宮へ去って行く。その前に子どもができているが、女は子どもは連れていけない。天人女房だと、子どもを両脇に挟んで空に舞い上がるが、童女はむしろ子どもを岸に送り届けたら、岸に置き去りにして去って行く。捨て子である。英雄誕生における幼児遺棄のモチーフが思い出される。モーセ、キュロス王、オディプスなど、英雄は一旦捨てられることを必要とする。捨てられるので一番多いのは川に流されることだ。籠に入れて流された幼

児の話が、たとえば川上から流れてきた箱を引き寄せてあけてみたら子犬が出てきたという「花咲爺」の話に連なってくる。犬は切り株に入っていることもあるが、だいたい川を下ってくる。桃太郎も同じである。あるいは、海を渡ってきたスクナヒコナも豆の莢に乗ってきたのだから、同類である。

川から流れてくる幼児の典型は桃太郎または瓜子姫だが、後者はいつも機を織っている。

もっとはっきりと川に流されるのは、日本では継母に嫌われた金色姫である。うつぼ舟に入れられて川に流されると、下流で拾われる。桑の木で作った舟をあげると眠っている姫のかたわらに蚕がいる。馬に惚れた女が、馬の皮に包まれてほおりだされると天に舞い上がってやがて蚕になって下ってくるのと同じである。

豊玉姫もウガヤフキアエズノミコトを真床おふすまにくるんで捨てて行く。ビルマの「クン・タイクム」の話では童女が岸辺に卵をおいて行くが、そのとき王子を桐の葉にくるんで行く。そこでこの王子を「桐の葉王子」と名付ける。あるいはそれは桑の葉王子でもよかったかもしれない。彼らは皆なにかにくるまれて捨てられる。あるいはうつぼ舟、ひさご、箱にいれられる。卵、桃、瓜でもおなじである。海に流される女では海南島の犬祖の妻もいる。そのもとに中国のパンコ説話では耳から繭のようなものが出て、ひさごの中に入れておくと犬になる。ヨーロッパでは猫を産んだ女である。が、一般に継母や姑に迫害される女は夫の留守に子を産むと犬とすり替

えられて犬の子を産んだと訴えられる。この子がやはり川に捨てられる。(犬の子も川に捨てられる)。白鳥の子どもたち(「エリオックス」)の話でも母親は犬を産んだとして屋敷の前に犬のように鎖につながれる。この白鳥もどうしても切れない金の鎖を首にかけている。捨て子伝承には犬、蚕、繭という一連のイメージがある。これも繊維文化の象徴だ。メリュジーヌや豊玉姫では「子捨て」は神話的状态を保っていて、文化的変容を受けていないから、捨てられた子が川に流された犬の子になって行く「花咲爺」型の展開をしない。しかし、その萌芽は認められる。犬吠えをして山幸を守る海幸がそれである。メリュジーヌでは猪狩りの風俗と「猪のジョフロア」が犬―狩猟―蛇退治を表している。猪が天敵である蛇を食い殺す構図がある。猪の牙を持って生まれた「鬼子」のジョフロアが母親メリュジーヌの蛇の本性をあきらかにする。イヌが狐女房を追いつめて正体を暴露させると同じである。

犬は文化の仲介者である。狩猟文化から牧畜文化になるときに犬がなくてはならない働きをした。とくに羊の群をまとめて整然と移動させる。後に羊毛の塊を糸にしてそれを縦横に織って、混沌を秩序に換える繊維という文化がすでに犬の働きで始まっている。

竜退治でも犬が主役を演じる。猿神退治でも実際に働くのは犬のシッペイ太郎である。「今昔物語」では、犬をつれた獵師が山中の隠れ里で猿神を退治する。次の話では僧が猿を退治しその後は馬も犬もなかった里にそれらのならいを導入したという。おそらくは仏

メリュジーヌ伝承の比較(篠田)

の教えも導き入れたというのであろう。犬が文化をもたらすのである。猿や竜を退治すれば外敵の恐れなく、安穩に農耕を営める。あるいは、犬が金屋子神を死なせたのもやはり一つの文化行為だろう。金屋子神は鍛冶の技術をもたらしたが、そのままでは神の技術で人間の文化にはならなかった。犬が神を殺して、鍛冶を人間の仕事にしたのだ。(餅的説話でも稲作を人間の産業にするには稲の神を一旦放逐する必要があった)。

竜は自然の力である。それを犬が文化に変える。その間に異類婚と異常出生の物語が挿入される。竜と王女の婚姻を犬が解消させて人間の世を作る。それをさらに文化的にしたのが、犬をつれた英雄による竜退治だ。豊玉姫では犬が出ていなくとも、その後の昔話の世界では「花咲爺」の犬にしる犬頭糸の犬でも金属か繊維に関わる文化機能を明白にもち、同時に父殺し、母殺しの役をする。おそらく、豊玉姫の方が古い説話の形を示しているだろう。そこでは、竜が自然の力をよりよく示している。竜は大海原を瞬時に越えて泳いでもくる。その原始世界を文化的にして行く過程で物語は昔話になり、猪は犬になる。あるいは、蛇は姿を消して、妖精になる。メリュジーヌと豊玉姫はイヌをつれた英雄の竜退治の古いレヴェルの物語である。ただ、その両者の古さのレヴェルは多少相違している。「古メリュジーヌ」をスキタイあたりに求めれば、あるいは、豊玉姫と同じレヴェルの伝承が見付かるかも知れない。^{23,24}

神との結婚は犬息子の登場で文化神話を完成させる。しかし、蛇

神が人間と交わって人間の社会をつくったあと、人間の側からの禁忌背反によって神の国に去って行く神話は、覗き見た神の正体が蛇であったという衝撃的な場面の記憶とともに様々な変化をへて、世界の各地に広まっていった原初神話の一つであったのではないだろうか。「鶴女房」や「白猫」はその原初神話を文化的に変容させて行く努力と、風土の変容でもあろう。

或いは、レイナツハの言うように本来ゼウスも蛇神であり、蛇の姿で同じ蛇神である母のレアと交わって(或いは娘のペルセポネ)有角の蛇ザグレウスその他を生み、世界を作っていたとするなら、蛇に依る創世記と、その蛇を人間が制御して行くプロセスとが異なる神話にもあったのかもしれない。豊玉姫やメリュジーヌはその原神話の始祖伝説化の一つの階梯を表すものかもしれない。しかし、ビルマの「クン・タイクム」のように竜が牧童(この牧童はイヌを つれていく可能性が高い)と交わって、子をはらみ、その子を岸に生み落として去って行く物語りの存在を見ると、蛇の原神話はともかく、かなり文化的になった状態での始祖伝承が「竜女」「見るな の禁」「子捨て」のモチーフを持って広まって行った可能性がうかがわれる。其れが、それぞれの地域の風土に合わせてさらに文化化を遂げ、イヌを伴った怪物退治や繊維文化伝承になり、開墾、建設伝承にもなると考えられる。それらの伝承間の伝播の関係は単一な説話の伝播ではなく、文化的変容を伴った異類始祖譚―繊維起源譚―怪物退治譚などの総体の、近隣地域間の接触伝播の反復ではないだ

ろうか。豊玉姫とメリュジーヌは同根である。しかし、その関係はもちろん直接的ではなく、朝鮮、ビルマ、インド、スキタイ、スラヴなどを間に介在させており、また、その後の展開や異伝をもふくんだ文化複合としての伝播であつたらう。

注

- 1 一つにはこれは「善射神話」である。作帝建は百発百中の弓の名手である。その技量を買われて竜宮から怪物退治に招かれる。得意の弓で敵を打ち倒した作帝建は褒美に王女をもらう。
- 2 牧童が湖の岸辺で笛を吹いていると湖底の竜女がそれに聞きほれてやってきて、牧童と結ばれる。その後、竜女が牧童の子を産む。
- 3 朝鮮に生まれた卵を岸に送り届ける竜の話がある。(三言説論文参照)
- 4 ヘラクレスが馬の群を追ってやってくると、エキドナが馬を奪って隠してしまふ。ヘラクレスが馬を探しているとエキドナが、自分と寝てくれば馬を返してやるといふ。その後、エキドナからスキタイの始祖が生まれる。
- 5 ガンガと一緒にあったサンタヌは生まれた子どもについて妻に逆らつてはならなかった。ガンガは子どもが生まれるたびに川に流す。王はしばらくしてとうとう我慢ができなくなって、妻の子捨てに抗議する。そのとたんに女神は約束が破れたといふて去って行く。
- 6 『梁塵秘抄』をもとにして、「走る女」を研究する。
- 7 この白鳥はとある老夫婦のところ若い女となってやってきて老人たちの世話をする。しかし、その美しさが王の目にとまって、城に召し出される。しばらくすると、仲間の白鳥たちが渡りやってきて、グルベールを呼ぶ。グルベールは白鳥になって去って行く。しかし、子どもの世話のために戻ってきたところを王に捕まって、城にとどまるように要請され

- る。
- 8 ケルトの女神。一人ぐらしの男のところへやってきて、留守中に掃除や炊事をする。
- 9 『マイスターの遍歴』中の「新メルシーナ」
- 10 『秘法十七番』
- 11 オーノア夫人の話が名高い。国際話形¹⁰⁾で、蛙の場合もある。妖精は典型的な授福妖精だが、物語としては王女が呪いによって蛙や猫になっていたと語る。
- 12 フランス王に興入れに来た王女で、悪者に捨てられて云々という。
- 13 魚の王は最後はどんな女によって調理して食べられる。しかし、その骨を埋めたところから竜退治の英雄が生まれる。と同時に剣と馬も生まれる。魚の王は竜王である。
- 14 この「容器」を「子宮」とみなすか、「ウツボ舟」とみなすか、「神殿」とするか、物語りの文化的レヴェルに依るだろう。
- 15 メリュジーヌを妖精とみなすと、妖精は彼らの秘密を覗き見ることを禁ずるのが普通で、異類婚の禁忌ではなくなる。
- 16 森の湖の中で戯れている妖精だが、本来は馬の性だと思われる。フランスでは水の中に馬が住んでいる。岸にあがって人を乗せて水底につれて行く馬型の悪霊もある。
- 17 メリュジーヌでも妖精が去った後はしばらくは子どもたちがそれぞれに活躍するが、やがて、リュジニャン家は衰退に向かい、数世代後には滅びて、歴史から消え去る。リュジニャン家は現実にはエルサレム王やキプロス王を出す、長くは続かなかった。
- 18 クロード・ゲニユベ『カーニヴァル』
- 19 繊維象徴のはじめはテントとしての「家屋」であるとプリルは指摘する。(『繊維の起源と象徴』一九八四)
- 20 加藤明「賀茂説話について」『日本神話研究』三。学生社、一九七七
- 21 「猫檀家」ほか。もちろんこれは両義的で化け猫譚とも接続する。

メリュジーヌ伝承の比較(篠田)

22 これもしかし、猿には悪意はない。化け猫・猫女房と同じく、猿婿・猿神の対が同じものの二面として考えられる。クモ女房でも悪意のあるものと、善意のものがある。語り口の違いでその二つが別れる場合もあり、本質的な相違であるかどうか疑問である。

23 猿婿

24 デュメジルの「ナルト伝承」にはアハスナルトが傷つけた鹿を追って海底の竜宮に行き、傷ついた王女(鹿)を治して結婚する話がある。アハスナルトには双子の兄弟アハスナルタグがいる。これと、傷ついた猪を追って地底へ行くセレベスの話はいずれも豊玉姫の話の原型に違いない。これと、スキタイの蛇女エキドナによる始祖伝承を結合させれば完全な原話ができあがるかも知れない。もう一つはナルト伝承のバトラスの誕生神話だ。母親は竜宮の竜女だが、蛙の姿で現れる。そして、誰からも侮辱を受けないことと言う条件で結婚する。ある時、ヘミユッツが蛙女房をポケットに忍ばせてナルトの集会に出かけると女を連れてきたものがあるとされて侮辱を受ける。蛙女房は子供をヘミユッツの肩に移植して竜宮へ逃げ帰る。